

第90回 みんなで作る音楽会 報告

日時：8月6日 水曜日 13:15 から 16:00

場所：公民館 114 室 7857

参加者：久我、塩路夫妻、山川恵子、岡田、松山、榎本、光長、高濱、高塚、清水、
安居院（記）計12名

ミュージカル「ボニー&クライド」 パイプオルガン

1. ミュージカル「ボニー&クライド」

13:15-15:15

これは、1930年代にアメリカ中西部で強盗や殺人を繰り返した実在のギャングカップル、クライド・バロウとボニー・パーカーを題材にしたミュージカル。

2022年1月にイギリス・ロンドンのシアター・ロイヤル・ドゥルリーレーンで収録された公演。

音楽を手がけたのはフランク・ワイルドホーン。

出演者はボニー役のフランシス・メイリ・マッキャン、
クライド役のジェレミー・ジョーダン。ほか



感想：

ミュージカル鑑賞いかがでしたか。わかりやすい筋書きでした。そして音楽も素晴らしいし、何より吃驚したのが場面展開のスムーズさだ。舞台装置の転換はほとんどなく、簡単な小道具が置かれているだけ。それで十分に理解できた。ドラマは、ほとんど休みなく続いていく。

ボニー、クライド、兄貴バック、兄嫁ブランシュ、ボニーの幼馴染の保安官、それぞれの母親、そして捜査官やテキサス州知事、牧師など、役柄それぞれにリアリティがあり、納得できた。

ボニーとブランシュの二重唱、クライドとバックの二重唱もお互い違う人を思って歌われるが、美しく素晴らしいハーモニーだった。

力強く迫力があつた歌としては、牧師の「主の腕は開かれている」が良かった、またバックダンサーも素晴らしかった。

1930年代のテキサスってこんな状態だったのだと時代背景もよくわかった。ドラマの展開がスピーディで、わかりやすかった。

また、役柄は異なるがそれぞれのおかれた立場に共感できる歌詩になっている。

アメリカの当時の時代背景が、彼らを作っていたのだ。

劇場に集まった観客の歌唱に対する熱狂ぶりに吃驚した。勿論、最後は全員がスタンディング・オベーション。推し活の人たちも来ていたのであろう。

ボニーとクライドは、子ども時代を子役が演じ、舞台の後半で、大人のボニーとクライドとともに舞台に出る、この子がこうなったのだという時代の流れを感じさせる印象深いシーンもあった。

短いシーンを繋いで展開されるが、それぞれのシーンの意味がキチンとわかる脚本と演出になっていた。打ち合いのシーンなど、照明の使い方にも工夫があつた。

歌だけでドラマを進めるシーンもあって、それを不自然に感じさせない作詞・作曲が際立っていた。

因みに、1967 年のワーナー・ブラザーズ映画「俺たちに明日はない」では、ボニー役がフェイ・ダナウェイでガソリンスタンドの店員 C. W. モスが加わって 5 人組の強盗団の話になっていた。

2. 休憩

15:15-15:25

次回、9 月 10 日水曜日 13:15-16:00 @114 室

3. スター・ウォーズで楽しむ！パイプオルガンの音楽会

15:25-15:50

「May the Force be with you(フォースと共にあらんことを)」と May the 4th(5 月 4 日)のごろ合わせが起源の 5 月 4 日はスター・ウォーズの日。パイプオルガンで「スター・ウォーズ」の代表曲を演奏！

パイプオルガンの音の秘密をクラシックの名曲で解説。

演奏：石丸由佳（パイプオルガン）



このパイプオルガンは、東京芸術大学奏楽堂のもの。

奏楽堂について；

因みに、我々は、旧奏楽堂の方をよく知っているが、1972 年には新奏楽堂建設の話が出て、古い建物はいったん解体して、明治村に移築することになっていたそうです。

しかし、1979 年に移築をめぐって反対論が起こり、計画はストップ。1983 年に結局、台東区が藝大から譲り受けることになり、1987 年に現在の場所に移築が完了しました。

新奏楽堂の建築開始は当然ながらその後で、落成は 1998 年。実は新国立劇場より後だということ。

演奏曲

- ① 映画『スター・ウォーズ』「メインタイトル」より Short ver. 作曲：J. ウィリアムズ
- ② トーク中実演 1：「トッカータとフーガ 二短調」より 作曲：J.S.バッハ
- ③ トーク中実演 2：「主よ、人の望みの喜びよ」より
- ④ トーク中実演 3：『修道院のためのミサ曲』より「グローリア：トランペットをバスで」より
- ⑤ トーク中実演 4：『主の降誕』より「イエスは苦しみを受け入れたもう」より
作曲：O. メシアン
- ⑥ トーク中実演 5：「帝国のマーチ（ダース・ベイダーのテーマ）」より
作曲：J. ウィリアムズ
- ⑦ 映画『スター・ウォーズ』「メインタイトル」より Full ver.
作曲：J. ウィリアムズ

以上